研修先：宮崎県立飯野高等学校

なぜ宮崎県立飯野高等学校の生徒は自主的に探究活動に取り組むのか

研修参加人数：1 人

研修期間：2024 年 9 月 3 日～2024 年 9 月 7 日

【研修先】
・宮崎県立飯野高等学校
【動機】
・探究学習は学校や担任の先生とその他の環境的要因によって取り組む授業内容が大きく異なり、教育現場の第一線で働く教員が困惑をしている。またそれにより校外の特色だけではなく、校内でも格差が見えつつあると言われている現状がある。そこで、全員が一定水準以上の力を養うという目的を満たすためにも、ある程度のマニュアル化をする必要があるのではないかという考えのもと、どのような探究授業であれば生徒が主体的に取り組むのかということに興味を持った。そこで、探究学習が必修 になる前より独自に取り組んでおり、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進 事業」担当者会議事例発表において、発表事例として扱われるほど注目されている宮崎県立飯野高等学校（以下：飯野高校）の普通科探究コースの生徒に話を聞きたいと考えた。
【研修内容】
飯野高校普通科探究コースの生徒が探究授業に主体的であるという前提のもと、生徒 40 名（2 年生 26 名 3 年生 14 名）へのアンケート調査を実施、並びに後日個別でインタビュー調査を実施。
【実施報告】
（1）生徒たちに 5 つのアンケート調査を実施し、結果としては次のようになった。
1. 探究の時間は好きですか、という質問では①好き 27 人（67.5%）②まあまあ好き 12 人（30%）③そこまで好きではない 1 人（2.5%）④好きではない 0 人（0%）であった。2. 探究の時間（週 2 時間）は多いと感じますか、という質問では、①多い 0 人（0%）②やや多い 11 人(27.5%)③やや少ない 22 人(55.0%)④少ない 7 人(17.5%)であった。3. 探究の時間・活動で地域の人と関わりはありますかという質問では①はい 36 人（90%）②いいえ 4 人（10%）であった。4. 探究の時間・活動で地域の方との関わりは多いと思いますか、という問いでは、①多い 19 人（47.5%）②やや多い 12 人（30%）③やや少ない 8 人（20%）④少ない 1 人（2.5%）であった。5. 探究の時間・活動でもっと地域の方と関わりたいと感じますかという質問では、①はい 40 人（100%）、②いいえ 0 人（0%）であった。
（2）インタビュー調査では時間の都合上全員に聞くことは叶わなかったため、データとしては不十分であるものの、なぜ探究授業が好きなのですか、という質問をした。主な回答としては、レールが敷かれていないことが自分の好きなように授業を受けられる点が特に良いという声が挙げられた。
【考察】
　まず初めに、アンケートの 1 の質問で 95%以上が好きであると答えたことより、生徒が主体的に取り組むためには、生徒自身が授業を好きであることが条件であるといえるのではないかと考える。また、次に 2 の質問においては、探究の授業時間を多いと感じている人が 0 人であり、時間を持て余している生徒が少ないことがわかるため、適切な時間量であるといえ

る。つまり、過半数を超える生徒が少ないと感じているというこの結果より、少ない時間だからこそ、授業に熱心に取り組む生徒や、課外時間を利用し取り組む生徒がいるのではないかと考えられる。

質問 1、2 のアンケート調査結果より、生徒が主体的に取り組むための要素として、生徒自身が探究授業を“好き”であることが最も重要なのではないかと考えた。そこで、インタビュー調査を実施し、生徒達と話しをしたところ、先ほどの主な回答に続いて、次のような解答も挙げられた。飯野高校では自分たちが企業のプログラムに乗るのではなく、自分たちで地域の人や企業に協力を仰ぐことのできる環境が整っているということだ。飯野高校では探究授業の本質である社会課題について現実を受け止め、解決までの過程を楽しむことができているように見受けられた。前文の様子は文部科学省による、生徒が主体的に課題に向き合い、解決に向かう姿勢を表しており、探究授業の目的を達成しているといえるのではないか。

したがって、飯野高校の探究授業では、自由度が高いことに加え、実現可能性を調査する手段と環境が整っているために、生徒自身が探究授業を面白い、あるいは好きだと感じ、答えの無い社会課題に向き合うことのハードルを低くすることに成功しているのだと考えられる。以上を踏まえ、生徒自身が行動することを求め、かつ行動に移しやすい環境をつくるという点を重視していくことで生徒の心理的ハードルを下げることに繋がると考えられるため、探究授業を好きになってもらう上で授業だけでなく環境整備も重要な点だと考えた。

次に、アンケートの質問 3～5 の結果より、生徒たちは地域の人との関わりについて興味・関心を抱いていることがわかる。そこで、地域の人との関わりや結びつきを増やすことでより生徒のニーズに合う授業を展開することができるのではないかと考えられる。また、生徒のニーズに合う授業を実施することで、より生徒の意欲を引き出すことが可能なのではないかと考える。特に質問 5 からわかるように「更に関わりたい」という回答が 100%であることから、地域との関わりを一定以上整えることは社会課題に向き合うハードルを下げるだけではなく、生徒たちの意欲促進に繋がると考えることができるのではないか。また、飯野高校は地域と関わる機会を設ける、マイプロジェクトへの積極的参加なども含め、環境が整えられているものの、生徒の意欲と比較すると、質問 4 から生徒のニーズに応えきれていないともいえる。

【まとめ】

先述した自由度の高さと、地域の人との関わりを意識した授業展開は相反していて難しい現状がある。一例として地域の方と関わる中で、どうしても生徒と地域の方の意見が相違することや、進め方を制限されて、自由度が下がってしまったという事例がある。そのため、探究授業に関しては、飯野高校以外の高等学校での調査を実施するなどさらなる調査が必要である。しかし今回の研修より、探究授業の実施には特に生徒自身が、担当教員・企業関係者・地域住民など周囲の大人に自ら働きかけることの重要性と、働きかけることのできる環境の必要性がわかった。

また前述において、探究授業が進んでいると言うことのできる飯野高校では、生徒が探究授業を好きであるという前提のもと、考察をした。けれども、本来の目的である探究授業格差是正という観点においての授業展開までは調査が至らなかった。

【感想】
私自身が地域みらい留学 365 で飯野高校に留学をしていた際、私を含めてクラスの全員誰ひとりとして探究活動が嫌だ、面倒だという生徒は居なかったように記憶している。しかし、出身高校では課題探究と呼ばれ る探究の時間の取り組みに対する熱意は正直高くはなかった。この差は一体なぜ起こるのかについて生徒の時よりも客観的に考えることができ、大変充実した研修期間を過ごすことができた。また、今回の報告書作成にあたり、私自身のアンケート調査量不足と質問不足等を実感した。そして、かつて在籍をしていたということや、探究という名目の授業を開講しているクラスが 1 クラスの高校での調査だったため、クラス間格差という面にはあまり目を向けることができなかったと感じている。したがって、今後は他の都道府県の高校でも調査をしていきたいと考えるきっかけになった。